

近代京都における都市住宅の構成と特質に関する研究

—近代都市住宅の形成過程に関する系統的理解—

主査 大場 修*¹

委員 山田 智子*², 石川 祐一*³, 高橋 清香*⁴

本研究は、京都旧市街地に現存する近代洋風町家の建築的特徴について類型的に検討した。その結果、これらは家屋構成の特徴から4種（「洋館連結型」「洋館付設型」「看板型」「箱型」）に類型化でき、純洋風家屋（煉瓦造やR.C.造を含む）を建築レベルで取り込むことにより形成されたことを明らかにした。特に「箱型」町家は近代に新たに成立した類型とみなした。また、道路拡張に伴う軒切りや隅切りで生じた狭小あるいは変形宅地には、その制約から箱型や看板型町家が多く建てられた。その特殊な敷地形状は、伝統形式を払拭した洋風意匠の外観や平面形式を形成する契機となったと考えられた。

キーワード：1) 京都、2) 町家、3) 三階建、4) 洋風、5) 和風、6) 近代、7) 都市住宅、
8) 道路拡張、9) 軒切り、10) 隅切り

A STUDY ON THE CHARACTERISTICS OF TOWN-HOUSES IN KYOTO-CITY OF MODERN AGES

For the systematically understanding of town-houses of modern ages

Ch. Osamu Oba

Mem. Tomoko Yamada, Yuichi Ishikawa and Takahashi Sayaka,

On this study, by picking up town-houses in Kyoto-city of modern ages, I investigated the characteristics of the personal styles and designs of modern ages. The summary of this study can be given below:

1) Many of the town-houses in modern ages took the characteristics of western designs. But the building styles of them succeeded in the traditional styles of old town-houses in Edo period such as the "Tori-Niwa" style. 2) In a word these town-houses have both western styles and traditional styles. 3) Influenced by extensions of streets, three stories town-houses came into existence after Taisyo period.

1. はじめに

筆者らは、すでに旧大阪市域における近代町家をとりあげ、近代特有の町家形成として三階建町家の成立と洋風意匠の摂取を指摘し、とりわけ洋風意匠は二階建と三階建の区別なく近代の町家を特色付ける要素として重要であることを明確にしている^{※1}。では、洋風意匠の摂取により町家形式がどのように変容したのか。洋風町家の成立要因や町家の洋風化の多様な諸相を明らかにするためには、震災により遺構数が限られていた大阪旧市街から、非震災都市である京都へと目を転じ、より大量に現存する近代町家のなかから洋風町家を抽出した上で、これらにおける意匠や形態の実態を遺構に即して検討する方法が有効であろうと考えた。

京都の町家はいわゆる京町家の通称が夙によく知られ、町家の代名詞ともなっている。歴史都市京都の町並は、震災を免れて中心部にも「京町家」が多量に現存する。ゆえに一般には近世以来の家並が広範囲に残ると思われがちであるが、市街地の大部分（鴨川以西）が元治元年（1864）の大火（禁門の變による「どんどん焼け」）で焼失したた

めに^{※2}、京都の家並は近代の町家を主体とし、近畿各地の近世町家を多く留める歴史的町並と比べて建築的には意外に新しい。にもかかわらず、「京町家」という呼称のブランドイメージに引きずられてか、従来の京都の町家に対する一般の関心と調査研究の殆どはその伝統的形式に向けられてきた^{※3}。近代の町家であっても、その評価はもっぱら近世的な意匠形式の洗練とその美的価値に主眼がおかれている。事実、文化財指定を受けた京都市中の近代町家は、その大半が近世以来の伝統的な町家形式が継承されたものである^{※4}。

一方、本論で詳しく述べるが、京都の旧市街地には、主に大正・昭和戦前期に建てられたもののなかに外観が完全に洋風の住宅建築が多数存在する。しかし、従来これらはその外観があまりにも町家の伝統形式とはかけ離れているために町家建築とは目されず、規模も小さいこともあってか、ほとんど注目されることもなかった。むしろ、これらの中で目立つものについては近代洋風建築として個別に掘り起こされ評価はされている^{※5}（この点は大阪でも同様であった）。

*¹ 京都府立大学 教授

*² 京都文教短期大学 専任講師

*³ 京都市文化財保護課 技師

*⁴ 京都府立大学大学院修士課程

これらを町家の近代的類型として系統的に捉える試みは管見ではまだないし、したがって、京都における都市住宅の近代史は近世町家の伝統形式の継承と洗練という側面以外は不明のままと言ってよい。しかし、一見、外観的には伝統的町家とは似ても似つかないこれら洋風の近代都市住宅と伝統的な京町家との接点を見いだし、これらを伝統的町家の系譜の上に捉え直すことができれば、その建築形式の特色に初めて系統的な理解が可能となろう。

以上のような近代京都の都市住宅をめぐる従来の関心と理解状況に対して、本研究では、商家を中心に医院住宅や専用住居も含め洋風意匠を内外に持つ近代町家に着目してその典型遺構を抽出し、これらの詳細調査と関連する史料調査を行い、伝統的な町家建築の理解を前提としつつ近代京都の都市住宅を特色づける動向を実証的に把握することで、近代京都の都市住宅史の一端を系統的にとらえたいと考えた。

対象とした遺構（「店舗併用」と「専用住宅」）は、京都中心部²⁶⁾において200件を越える所在を確認し²⁷⁾、これらの中で42棟（表2-1）について実測調査を行った²⁸⁾。資料とした町家遺構の建築年代は、結果的には昭和戦前期に集中した（表2-1参照）。この状況は予備調査で得られた遺構年代の傾向とも対応している。

以下では、まず実測調査などにより採取した近代町家の中で、典型事例とみなせる主要遺構を個別に取り上げ、次いでこれらを類型化することにより、洋風意匠の摂取の実態とその特徴を明確にしたい。

2. 主要事例の概説

調査家屋の建築年次は、明治中期から昭和10年代まで広範囲にわたる。しかし、大半は先述の通り昭和戦前期に集中していることから、洋風化がこの時期にかなり普及し浸透していることが窺える。しかもこの期においては、建築年次の少々の前後関係には本質的な意味はないと判断された。そこで、以下の代表的遺構の個別各説は、次章における類型的検討の前段として、次章との関連を明確にするために論述する遺構の建築年次が多少前後している。

2.1 旧家辺時計店（図2-1、写真2-1）

旧家辺時計店は明治4（1871）年創業で、京都における舶来品店の草分的存在であった²⁹⁾。当初は和風の商家であったが、明治23年（1891）に現在の洋風煉瓦造りに建て替えられる。現建物は、木骨煉瓦造二階建（当初はその上部に塔屋及び時計塔が付属していたが、現存せず）の店舗棟と、その裏手に木造総和風二階建の居住棟が建てられている。店舗の一階表には三連アーチを飾るが中柱を欠きプロポーションもやや不自然で、意匠的には稚拙さが拭えない。店舗の奥隅部には鉄扉付きの二階建倉庫（金庫）が設けられている。伝統的町家であれば店舗に接して

蔵を配するところであるが、いわば二階建の蔵が店舗内に内蔵された形となっている。二階も一階と同様洋風でまとめられていて、大小3室の個室に分けて廊下で結ぶ。

店舗の裏手には中庭と坪庭及び平屋の玄関棟を挟んで総二階建の居住棟を建てている。玄関前の坪庭に面した内玄関からは裏に抜ける通り土間を設けている。床上にも廊下を表裏に通して玄関棟上手の広縁から直接に店舗へ接続するとともに、上手座敷と土間に面する日常空間とを区分しているなど、その平面形は巧みで伝統的家屋の中にも近代化の一端がみとれる。

旧家辺時計店は、ランドマークにもなった時計塔を含め、煉瓦造の洋風店舗を導入した最初期の本格商店建築として全国的にも稀少である。しかし、この店舗棟の背後には和風の居住棟があり、両者が中庭を挟みつつ玄関棟と通り庭で接続されている点は、本稿がその構成を初めて明らかにした。同時計店のこの家屋配置と通り土間を軸とする平面構成は、近世以来の京町家の伝統形式に則っている。要するに、従来洋風明治建築としてのみ評価されてきた同時計店は、実は京町家の伝統形式に沿いその系譜上の建築であり、京町家の近代化の好個の事例であると捉えることができるのである。

2.2 平楽寺書店（図2-2、写真2-2）

平楽寺書店は仏教学術書を扱う老舗の出版社である。オーダーを基調とする古典主義的ファサードの店舗棟と、その裏手に店舗棟に接して和風の居住棟が建つ。店舗棟部は昭和3・4年に建てられたR.C.造三階建てで、三階までは高さ約10メートルに達し、建設当初は周囲の木造家屋を圧していたであろう。一階は店舗で間仕切りはなく、二階には階段室前の小ホールと応接室と書庫をとり、三階は倉庫である。

居住棟は純和風で、昭和22・3年頃に建て替えられたものである（それ以前は不明）。寄棟瓦葺き木造二階建てであるが、店舗棟に接する階段室部は三階建てになっている。一階は、玄関から裏庭まで通り土間を通して台所とし、その上手に仏間を兼ねた6畳の座敷を設けている。二階には次の間を付属する10畳の整った座敷を設けている。

平楽寺書店は、表側から店舗と階段室、さらに居住棟の3棟が構造を違えながら一体の建築をなすという特異な構成をとっている。すなわち、店舗のみを独立の耐火構造とし、住機能を木造部にまとめて店舗にびたりと付設するという形式は、先に取り上げた店舗棟と居住棟とをそれぞれ独立した棟として接続する旧家辺時計店とは異なる。表裏の棟を一体の建築として構成する近代町家の一例として注目される。

2.3 山内家住宅（図2-3、写真2-3）

大正11年（1922）に建てられた専用住宅で、純和風の

表2-1 二次調査家屋一覧表

No.	家屋名称	所在地	建築年	当初の業種	敷地形状	立地	軒高	建築規模：間		家屋形式	平面形式	構造・階数	屋根形式
								間口	奥行				
1	旧家辺徳軒計店	中京区三条通舊小路東入	明治23年	時計店	長方形	南面	●	6間	9間	洋館連結型	通り庭型	木造骨煉瓦3階+木造2階	陸屋根+切妻
2	津田基建設	左京区岡崎成勝寺町3	明治40年	津田組(工務店)	台形	東西面	●	7間	7間半	洋館連結型	表層造型	木造1階+木造2階	陸屋根+入母屋
3	日加藤医院	下京区西屋町通四条下船頭町	大正年間	加藤医院(皮膚科)	台形	角地	●	7間	10間半	洋館付設型	当初不明	木造2階+木造2階	陸屋根+入母屋
4	吉田たばこ店	上京区河原町通上生洲町	大正10年	タバコ・写真・書店	不明	角地	●	2間	4間	箱型	積上型	木造3階	陸屋根
5	山内家住宅	上京区上長者町通元土御門町	大正11年	専用住宅	L形	南面	●	5間	8間	洋館付設型	通り庭型	木造2階+木造2階	陸屋根+入母屋
6	富士ラビット(旧日光社)	下京区七条通新町西入	大正14年	輸入車販売	長方形	角地	●	7間	10間	洋館付設型	表層造型	R.C.造3階+木造2階	陸屋根+切妻
7	必井ビル(旧森田牛乳)	中京区河原町通奥川上拾物町	大正14年	牛乳屋	方形	角地	●	5間	4間半	箱型	積上型	S.R.C.3階	陸屋根
8	フタベ	上京区室町通下長者町下近衛町	大末~昭初	診察所?	長方形	北面	●	5間半	11間半	洋館連結型	外道路型	木造2階+木造2階	切妻+入母屋
9	クリーニングみつば	上京区河原町通伊勢屋町	大末~昭初	中華料理店?	長方形	角地	●	2間半	4間	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
10	香島屋	東山区四条菰田町南側	昭和元年	婦人用靴履物販売	長方形	北面	●	2.8間	7間	箱型	積上型	R.C.造4階	陸屋根
11	旧大黒屋六兵衛	東山区三条東西海子町	昭和初期	漢方薬製造販売	長方形	南面	●	3間半	4.7間	看板型	通り庭型	木造3階	切妻
12	井上(旧浅田商店)	上京区上立光通浄福寺東入上	昭和初期	襦袢・糸	長方形	西面	●	6間半	9間	洋館連結型	表層造型	R.C.造2階+木造2階	陸屋根+入母屋
13	奇麗家住宅	上京区河原町通荒神口上宮垣町	昭和初期	専用住宅	長方形	角地	●	8間	6間半	洋館付設型	前庭型	木造2階+木造2階	陸屋根+奇棟
14	クマノ住宅	左京区正徳院山王町15	昭和初期	旧吉田国際通信機	長方形	西面	●	5間	5間	箱型	積上型	木造2階	奇棟
15	旧藤原官帳車店	上京区今出川通り鶴小路角	昭和初期	自転車店	楔形	角地	●	5間	2間	箱型	積上型	木造2階(5戸一建)	片流れ
16	宮城ミシン工業所	上京区千本通丸太町角	昭和初期	様式用具製造販売	三角形	西北	●	4間半	2間半	看板型	通り庭型	木造2階	片流れ
17	太田家住宅・他4戸	下京区東洞院五条上深草町	昭和初期	五戸一進長屋：専用住宅	長方形	東面	●	2間	6間	洋館付設型	通り庭型	木造2階(五戸一建)	切妻+片流れ
18	旧平谷医院(泉島)	下京区新町通五条下樋子町	昭和初期	医院(小児・内科)	長方形	角地	●	6間	12間半	洋館連結型	表層造型	木造2階+木造2階	陸屋根+入母屋
19	旧大西歯科	下京区河原町通万屋町	昭和初期	歯科医院	長方形	東面	●	3間	5間	箱型	積上型	木造3階	切妻
20	森永ルタス	下京区河原町通出水町	昭和初期	牛乳販売	長方形	東面	●	2間半	5間	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
21	町田家住宅	中京区衣通通御池上上妙覚寺町	昭和2年	専用住宅	長方形	東面	●	4間半	8間	洋館付設型	外道路型	木造2階+煉瓦2階	陸屋根+入母屋
22	キヨウカ理容院	上京区河原町丸太町上出水町	昭和2年	不明	長方形	角地	●	3間	5間	看板型	通り庭型	木造3階	片流れ
23	宮川美髪館	下京区油小路四条下	昭和2年	理容店	長方形	角地	●	5間	1間半	箱型	積上型	木造2階(鉄筋入)	陸屋根
24	加納洋服店	中京区寺町通御池上	昭和2年	テーラー	長方形	西面	●	3間	7間	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
25	川崎たばこ店	下京区河原町通西橋詰町	昭和2年	雑貨店	長方形	西面	●	2間半	6間半	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
26	山本家住宅	下京区河原町通五条上安土町	昭和2年	店舗(喫茶店、質屋等)	長方形	西面	●	3間	6間	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
27	辻商店	下京区堀川通四条下堀川町	昭和3年	呉服洋装卸	L形	東面	●	5間	8間	看板型	通り庭型	R.C.造3階(4階屋根裏)	切妻
28	平泉寺書店	中京区東洞院通佛小路下	昭和3年	書店	長方形	東面	●	4間	6間	洋館連結型	表層造型	R.C.造3階+木造2階	陸屋根+入母屋
29	加藤家住宅+6戸	下京区七条河原町西南角	昭和3年	長屋建て商店	台形	角地	●	2.3間	4間	洋館連結型	表層造型	木造3階+木造2階	陸屋根+入母屋
30	村中理容院	中京区室町通錦葉師山伏山町	昭和3年	ノタ整髪	長方形	角地	●	3間半	2間	箱型	積上型	木造3階	切妻
31	中川製作所	左京区吉田近衛町26	昭和4年	化学容器製造販売	長方形	西面	●	3間半	5間	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
32	ミヨシ堂	上京区千本通今出川上上善寺町	昭和4年	時計屋	台形	西南面	●	4間	8間半	洋館連結型	表層造型	R.C.造2階+木造2階	陸屋根+切妻
33	高島医院	上京区丸太町東一筋目上袋屋町	昭和5年	高島医院(内科)	長方形	西面	●	6間	6間	洋館付設型	外道路型	木造2階	入母屋
34	鈴木医院	上京区千立亮猪熊車入役人町	昭和5年	鈴木医院(耳鼻咽喉科)	長方形	南面	●	7間半	7間半	洋館連結型	通り庭型	木造2階	切妻+奇棟
35	柳樹堂	下京区高倉通四条下	昭和8年	印刷業	長方形	東面	●	4間半	6間半	看板型	通り庭型	木造2階	切妻
36	旧倉八医院	下京区高倉通源松原下大江町	昭和9年	小児科	長方形	角地	●	3間	5間半	看板型	前土間型	木造3階	切妻
37	高野眼鏡店、他1戸	下京区河原町通富永町	昭和9年	眼鏡店	長方形	西面	●	2間半	4間	看板型	通り庭型	木造2階(二戸一建)	切妻
38	村上調新堂	中京区寺町二条上	昭和10年	洋菓子製造販売	長方形	西面	●	2間半	9間	洋館連結型	通り庭型	木造2階+木造2階	陸屋根+切妻
39	富長	中京区錦小路通室町西入	昭和10年	洋物富長商店	長方形	南面	●	6間半	12間	洋館連結型	表層造型	R.C.造2階+木造2階	陸屋根+入母屋
40	奈良外科病院	中京区藪屋町通六角下	昭和10年	奈良外科病院	方形	西面	●	6間	7間半	箱型	前土間型	木造2階(一部3階)	切妻
41	ハルミ学院	上京区河原町通堀井町	昭和11年	写真館	長方形	角地	●	6間	10間	箱型	前土間型	木造3階+木造2階	切妻
42	吉田染物店	中京区二条通東洞院西入仁王門町	昭和11年	工業染料販売	長方形	角地	●	3間半	6間	看板型	通り庭型	木造2階	切妻

主屋を通りから約4間下げて建て、手前に前庭を設けてアプローチとし、通りに面しては門扉と洋風の客間を並べ建てている。独立した二階建洋館の客間と主屋との間には玄関を配し、主屋には内玄関を設けるといった構成をとる。一階が応接間で二階を書斎とする洋館は玄関に接続し、主屋に対して独立した配置と使われ方が想定されている。

主屋は二階建てで、内玄関から裏手へと土間を通して勝手(台所)とし、上手には座敷を配するなど、平面は伝統的町家のそれと同じである。このように、伝統的な和風住宅の表側に純洋風の一室程の小規模洋館を建て、外観のアクセントとする事例は京都の中心市街を少し離れると多く認められる。当家住宅はその代表例として取り上げた。

2.4 旧大黒屋(図2-4,写真2-4)

外観は、モルタル塗で蛇腹や装飾タイルで飾られたパラペットによる純洋風三階建てで、特に三階部には三連のアーチ窓を設けて洋風意匠を強調する。ただし、三階部の軒高は低く、いわば中三階建てのような階高を構成する。

大黒屋は、元々漢方薬を扱う伝統的な町家であったが、昭和初期に三条通りの道路拡幅により敷地表部分が約3間程斜めに軒切りを受けた。これにより当初1列3間取りの標準的な規模であった町家は、店の間はもちろんナカノマの一部まで削られた。この結果、元のナカノマの位置に店を設け、その奥には元の座敷を4畳に狭めて板間を設ける改修が施された。二階も表側1室分が削られ、屋根裏の一部を三階として新たに開口部が設けられた。このように、当家住宅は軒切りを契機に中三階建てへと大改修された事例であり、純洋風の外観が軒切りにより成立した事例として注目される。

2.5 加納洋服店(図2-5,写真2-5)

同洋服店は、昭和2年にそれまでの二階建て町家をテラーとして改修されたものであるが、その際、正面の壁と北側の側壁を屋根面よりもほぼ一階分高く建て(内側から控え柱で保持している)、窓型を開けてあたたかも陸屋根の三階建て洋風町家のように見せかけた事例である。これほどに高いパラペットを立ち上げた例は現時点では他に類例をみない。店舗の室内も純然たる洋風意匠でまとめられていて、しかも奥行の深い店舗内部に洋服の仕立て作業に過不足ない自然光を入れるための大面積のトブライトも目を引く。

同洋服店の最大の特徴である疑似三階建ての外観は、その業種が求める純洋風仕様の店舗を強調する手段とみなされよう。ビルディングに「見せる外観」は、洋風への強い指向性が実体化されたものである。同洋服店の外観は、それが疑似的であるゆえに、当時の小規模店舗における理念としての洋風店舗のイメージをよく示しているようにも思われる。

2.6 村中理容院(図2-6,写真2-6)

この理容院は、室町通りに面して蛸薬師通りとの交差点に位置している。昭和3年に狭小な角敷地にほぼいっばいに建てられた木造モルタル塗三階建てで、屋根は陸屋根に近く箱形で建坪が狭い分縦長の形態が強調されている。壁面は一階にのみ飾り煉瓦タイルを貼りモルタル塗の上階と見切って縦長の外観を引き締めつつ丸窓を配してアクセントとするなど、小規模ながらその瀟洒な意匠は室町通りで異彩を放っている。

建坪が8坪程のため、一階は理容室と階段、トイレのみで、二階に台所をはじめ和室を2室、三階にも2室の和室を設けている。要するに一階は店舗で占められるために居住部分をその上に積み上げた形となっている。従って通り庭を持たず、職住をフロアで分節する。この種の洋風町家の例は少なくはないが、前近代には見られない近代独自の家屋形式であろう。

2.7 香島屋(図2-7,写真2-7)

昭和元年(1926)に大林組の設計施工により建てられたR.C.造四階建て(地下室をもつ)の店舗併用住宅である。一階の表より3間分と二階の全面が婦人用靴履物販売のための店舗として使用され、住居部は主として三階に集められている。一階の裏手は当初は狭い台所と食事室があった。四階は物置と予備室である。要するに、この建物は一・二階を店舗とするが店舗専用建築ではなく、その上階に住居棟を積み上げるような構成が特徴である。四階建て店舗併用住宅の事例として注目される。

2.8 松井ビル(旧森田牛乳)(図2-8,写真2-8)

河原町通りの道路拡幅(軒切り)により敷地の約6割が削られ、奥行が約4割に減少した。そのために、大正14年(1925)に残余の敷地いっばいに新築されたのが同ビルで、R.C.造三階建てである。当初一階部は牛乳店として使用され、住居は二・三階に設けられ、職住を上下階で一体とする店舗併用住宅である。住居部の室内は和室を基本に構成され、モダンデザインの外観とは対照的である。

2.9 ミヨシ堂(図2-9,写真2-9)

千本今出川角地に建つミヨシ堂は、家徳時計店の番頭が昭和4年に建てたという¹⁰⁾。千本通りは、市電敷設のために今出川・北大路間が昭和4年に拡幅された¹¹⁾。それに伴う隅切りにより敷地が台形状となり、その形状にそって時計塔¹²⁾をもつR.C.造二階建ての店舗が建てられた。しかし、R.C.造とするのは店棟のみで、裏手には以前から建つ木造の座敷棟を残し、両者は隙間をあけずに接合している。異なる構造体を結合する点では、平楽寺書店などと同じである。書店や時計貴金属を扱う店舗として耐



写真2-1 旧家辺徳時計店
(『京都基構』より)

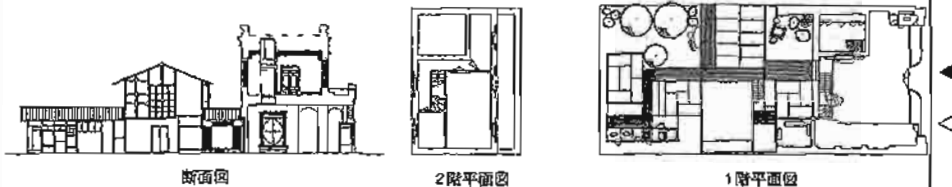


図2-1 旧家辺徳時計店



写真2-2 平楽寺書店

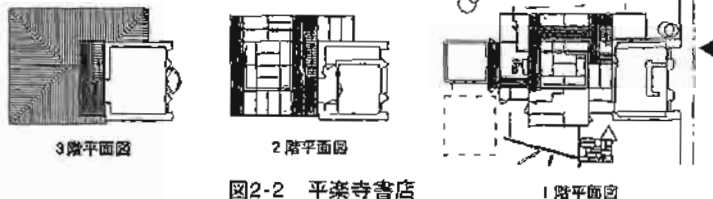


図2-2 平楽寺書店



写真2-4 旧大黒屋



写真2-3 山内家住宅

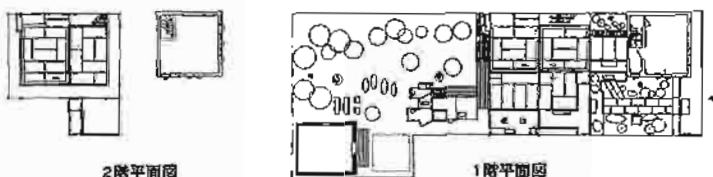


図2-3 山内家住宅



写真2-5 加納洋服店

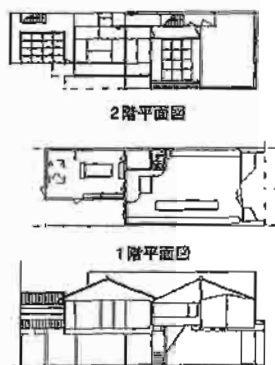


図2-5 加納洋服店



写真2-6 村中理容院



図2-6 村中理容院

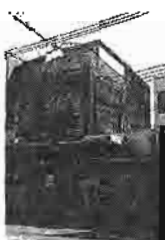


写真2-7 香鳥屋

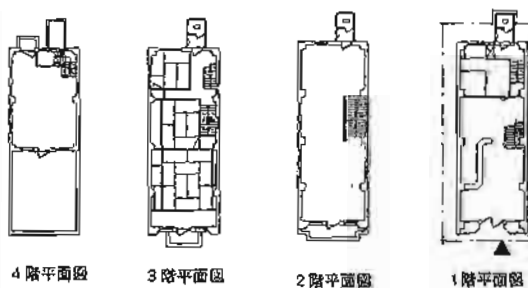


図2-7 香鳥屋



写真2-8 ミヨシヤ



写真2-8 松井ビル

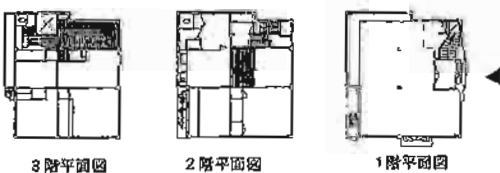


写真2-8 松井ビル

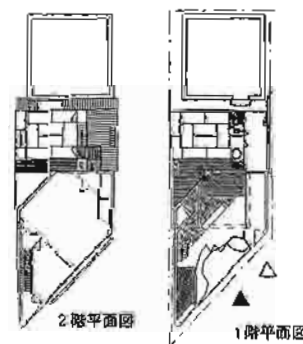


図2-9 ミヨシヤ

火性が重視されたためであろうが、それを店棟に限っている点は東京の土蔵造りの店蔵と同じ思想が窺える。

しかし、ミヨシ堂の最大の特徴は台形状敷地に対応した不正形プランである。店舗の間取りは、一・二階ともにその形状を巧みに処理して特異な平面を構成するが、裏手の座敷あるいは表裏に抜ける通り土間の構成の基本形は伝統的な町家のそれと同質である。ミヨシ堂はR.C.造で、その外観は当時先進的なモダンデザインの傾向を持ち、平面も、店舗部分は隅切りの影響を受けて独自の構成が目されるものの、その基本構成には伝統的町家との共通性も看取される。

3. 洋風町家の家屋類型

京都の洋風近代町家は、まず主屋が一棟のものと同様の複数の棟で主屋を構成する場合とがあることが前章の個別遺構から知り得る。一棟型の場合は、切妻平入の伝統的な町家の外形を維持しながら、そのファサードのみに洋風意匠が施されているものと、外形が主として箱型で、屋根は陸屋根やそれに似せて作られ、構造も木造に限らずR.C.造もある。前者を仮に「看板型」、後者をその形状により「箱型」と呼ぶことにしたい。

複数棟で主屋を構成する場合は、通常和・洋の棟を接続するケースが多く、その接続形式から二種に大別ができる。まず主屋の主体部分は和風でこれに別棟の洋館が付設されているものがある。この洋館は例えば書斎などこれ自体まとまった用途の部屋として用いられ、内部も洋室に造作される事が多い。これらを「洋館付設型」と仮称することにした。

一方、和洋の両棟を主に前後に接続させそれぞれに入口を設ける形式も多い。通常これらは、後に詳述するように洋館部を店舗棟や事務棟として表側に配置するケースが一般的である。このような家屋形式を「洋館連結型」と呼び「洋館付設型」と区別することにした。

以下、各類型の特徴について具体例を挙げながら要記する。なお、いずれの型の遺構も建築年代は大正末期から昭和初期に集中し、各類型の成立時期や類型間の年代的な前後関係についてはよくは分からない。しかし、明治23年築で遺構中最古の家辺徳時計店は洋館連結型とみなせることから、同型から検討を始めた。

3.1 洋館連結型町家 (図3-1~2, 写真3-1~2)

明治23年の旧家辺徳時計店を先駆けとし、前章で述べた平楽寺書店やミヨシ堂もこれに相当する。他に富士ラビット(大正14年,1925,外車販売代理店)、旧浅田商店(昭和初期)、村上開新堂(昭和10年,洋菓子製造販売)、富長商店(昭和10年,呉服卸業)など類例は多く、中規模以上の比較的大型の店舗併用住宅に用いられる家屋形式である。多くは通りに面して洋風の箱形店舗を建て、その

裏手に中庭を挟んで居住棟を接続している。居住棟は木造であるが、店舗棟はR.C.造も多い(富士ラビット、旧浅田商店、平楽寺書店、富長商店など)。

短冊状の敷地において店舗棟と居住棟とを前後に並べ、店舗棟を通常敷地の間口幅いっぱい建てるために、特に店舗棟をR.C.造などの箱形建築とする事例では、通から一見するだけでは中・小規模な洋風の近代商業ビルと区別が付きにくい(ミヨシ堂、富士ラビット、旧浅田商店、富長商店、など)。事実、店舗棟は二・三階建て、内部に専用階段を設け上階に営業室を確保するなど業務用の専用建築として独自性が高く、しかもR.C.造にすることで店舗棟の耐火性を確保しつつ、居住棟との明確な区分が建築的に図られている。

旧家辺徳時計店は言うまでもなく、平楽寺書店や富士ラビットなども店舗棟における洋風の意匠形式は早くから注目されていて、市内における近代洋風建築としてすでに各紙で紹介されていることは先に述べた。しかし、これらの遺構を、店舗棟から裏手に続く居住棟までを含め建築全体として見れば、その平面形式は、まず土間を店舗棟から居住棟を貫いて裏手まで通し、店舗棟の裏に接して玄関と中庭を設け、さらに居住棟を接続するという構成で共通する(ただし、平楽寺書店とミヨシ堂は店舗棟と住居棟とが接して一体に建てられている)。

この平面構成は、近世以来の伝統的な表屋造りの町家形式と同じである^{註19}。店舗棟(表屋)は平面や形式、意匠は様々であったが、それは店舗規模の拡大や業務内容の変化に伴い、近代的な変容が顕著であるため、一方の居住棟の平面構成には共通性が認められ、伝統的な表屋造り町家のそれと基本的には変わらない。要するに洋館連結型は、表屋造りの家屋配置に則りつつ、店舗棟(表屋)における近代的商業建築への自立的発達により成立したと捉え得る。対照的に、表屋部の近代的変化に比べれば、居住棟の変化は緩慢で、通り土間の勝手廻りや座敷廻りの構成などは総じて保守的であり、前近代における基本形式が長く温存されていることが明らかとなる。

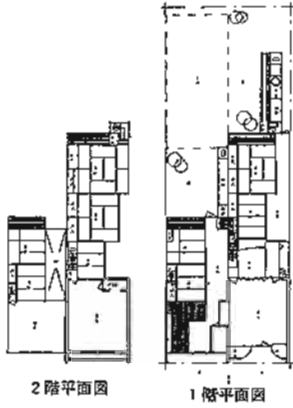
3.2 洋館付設型町家 (図3-3~5, 写真3-3~5)

市中に現存する多数の専用住宅の中で、外観に洋風を施す形式としては、居宅の前面に通りに面して洋館(多くは二階建て)を付設するものが最も多い。先に取り上げた山内家住宅(大正11年)が典型例であり、他に斉藤家住宅(昭和初期)などがこれに相当する。洋館部は主として応接間として設けられている。この形式は、近代の和風住宅に洋風応接間を付設する手法として京都に限らず広く用いられ、近代専用住宅における洋風摂取の典型形式である。また、戸建住宅のみならず長屋建て住宅にも太田家住宅(昭和初期)をはじめこの形式は散見される。

洋館付設の珍しい形式としては、和風の玄関棟とその奥



写真3-1 村上開新堂

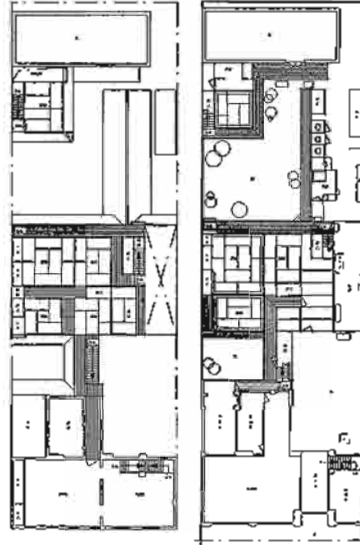


2階平面図 1階平面図

図3-1 村上開新堂



写真3-2 富長商店



2階平面図 1階平面図

図3-2 富長商店



写真3-3 太田家住宅



2階平面図

1階平面図

図3-3 太田家住宅



写真3-4 町田家住宅



2階平面図



1階平面図

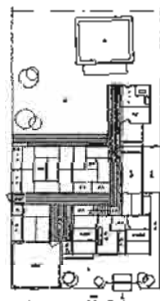
図3-4 町田家住宅



写真3-5 高島医院



2階平面図



1階平面図

図3-5 高島医院



写真3-6 中川製作所



2階平面図



1階平面図

図3-6 中川製作所



写真3-7 西湖堂



2階平面図



1階平面図

図3-7 西湖堂

の居住棟との間に洋館（客間）を挟み込むような形式で、町田家住宅（昭和2年）がその例である。

併用住宅にもこの種の形式を見いだすことができる。高島医院（昭和5年、内科）では、和風の主屋前面に、通りに面して建つ洋館（二階建）を診療室に当てている（洋館の二階は書斎）。この場合、玄関及び待合室は和風主屋に設けられており、洋館は専用住宅における応接間と同様の位置関係にある。旧加藤医院（大正年間、皮膚科）も診療室を独立した洋館（二階建、二階は書斎）建てとしている。同家の主屋は規模が大きく、表側に調剤室や診察室などを広く設け、裏手の中庭に面して洋館を配しているために、通りからはその外観は望めないが、和風の近代住宅の一部に洋館を巧みに配置した事例として注目される。

なお、ワタベ（大正末期）も当初診療所であったと伝える（詳細は不明）。前後の和館の間に二階建洋館を組み込んだ特異な形態は先の町田家住宅と同様である。

このように、和風主屋の一部に洋館を組み込む洋館付設型は、洋館を表側に建てその外観を強調する配置が大半を占めつつも、和風主屋の奥部や中間部に洋館を抱え込むような洋館配置も散見され、その家屋構成は一様ではない。しかし、専用住宅や開業医住宅などに用いられる洋風摂取の一般的形式として重要である。

3.3 看板型町家（図3-6～9, 写真3-6～9）

前章の加納洋服店は、二階建主屋の外壁2面をパラベットとして高く立ち上げ、三階建のビル風外観を装っていた。このようにパラベットを用いて外観を洋館風に見せる事例は、同洋服店のような極端な例は珍しいが、二・三階建の中小規模の町家が洋風意匠を外観に施す最も一般的な形態である。調査事例も多い。

中川製作所（昭和4年）や西湖堂（昭和8年）、吉田染料店（昭和11年）などは、伝統的な町家建築の外観から底の出を取り去り、パラベットで屋根の軒先を隠し、モルタルやタイル、人研ぎ石張りなどの二階外壁に縦長のガラス窓を填めた木造の店舗併用住宅である。一方、旧大黒屋（昭和初期）やキヨラカ理容院（昭和2年）などは、三階建てで縦長の箱形の外観を構成する。前記の中川製作所、西湖堂、吉田染料店などと比較すれば、伝統的な町家の外形からいっそう脱した小規模ビルディングのような外形を形成する。

看板型町家の平面は基本的には通り土間を持ち、部屋を土間に沿って並べる伝統的な町家平面を踏襲している。一階の室内には店の間を除けば洋風的な造作は認められない。二階もそのほぼ全面が居室化され、その最奥に二階座敷が設けられているものが大半である。

また、辻商店（昭和3年）はR.C.造三階建の純洋風の主屋を構成している。しかし、平面は、伝統的町家のそれを直写したものである。平面の伝統性と外観、構造形式に

おける近代性との間のギャップは著しい。このように主屋を一棟で構成し、その外観を洋風でまとめながら、一方で伝統的な通り土間形式を踏襲する点は、看板型町家と同じである。要するに、辻商店はR.C.造ではあるものの、看板型町家の延長線上に位置する事例とみなしたい。

市中にはモルタルやタイル貼りのパラベットで外観を洋風化したこの種の近代町家は多数現存する。R.C.造の辻商店のような事例までもを含め、昭和期における小・中規模町家に最も普及した洋風摂取の型と位置付けられる。

3.4 箱型町家（図3-10, 写真3-10）

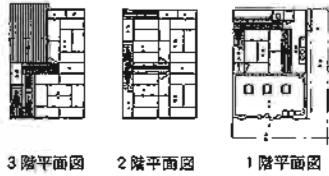
箱型町家は、前章の村中理容院や香鳥屋、松井ビルなどがこれに該当し、他にも宮川美髪館（昭和2年、理容店）など、小・中規模の二・三階建店舗併用住宅に多く認められる。構造は木造が主流であるがR.C.造もあり（香鳥屋、松井ビルなど）、外壁をタイル・モルタル・石貼りなどで仕上げ屋根は陸屋根を基調とするために、外観は四面が完全に洋風化され小型の近代洋風ビルディングに見える。内部は、店部分を除けば洋風への指向は弱く、洋風の外観とは好対照ではある。しかし、室内にて造作の和洋の違い以上に重要なのはその平面形式である。箱型町家の平面は、一階はすべて店舗となるものが多く（香鳥屋では二階も全フロアーが店となっている）、従って通り庭型の構成をとらず、居住部は二階以上に持ち上がっている点に留意すべきである。上階を居住フロアーとし、階で職住を分ける。伝統的な町家平面では職住の区分は表裏で行い、表屋造りあるいはその発展形である洋館連結型では棟を前後（表裏）に分けることでその区別をより明確化している。従って箱型町家は、その点で伝統的な町家の平面形態を脱した新たな都市住宅の型を備えているとみなせよう。

この種の積み上げ型とも呼ぶべき平面構成の成立要因は様々であろうが、まず明らかなのは、狭小な立地条件に規定されている場合である。その端的な例は村中理容院や宮川美髪館である。前者は建坪が8坪に満たず、後者も7.5坪と小規模である。一方、香鳥屋などの場合は、主屋の間口3間弱、奥行約7間で標準的な京町家の建坪であるが、店舗面積が主屋規模に比して大きいため、一・二階フロアーが店空間に当てられている。松井ビルも間口約5間、奥行約4.5間であるが、一階全体を店舗に割り振られている。

このように、箱型町家における積み上げ型平面は、狭小な敷地条件や、店舗面積の拡大などを背景に成立したものと考えられる。平面にみる伝統形式の払拭は箱型町家の重要な特質である。その伝統性を欠いた平面からはいわゆる町家的外観は想起されにくい。同型町家に見る非伝統的な箱型の外観は、その「近代」的平面を前提として成立したと考えられる。町家の伝統形式とは異質の、まさに近代京都に特有の新たな都市住宅の型をこれに求めたい。

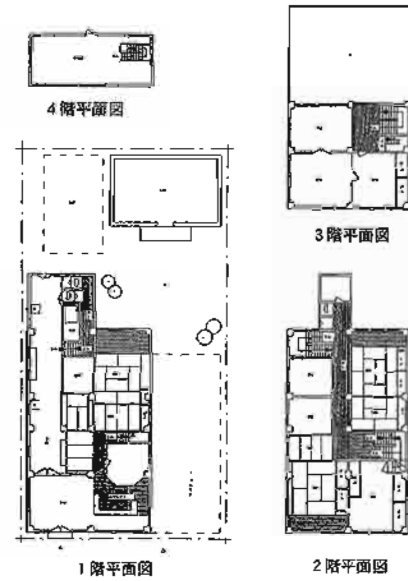


写真3-8 キヨラカ理容院



3階平面図 2階平面図 1階平面図

図3-8 キヨラカ理容院



4階平面図

3階平面図

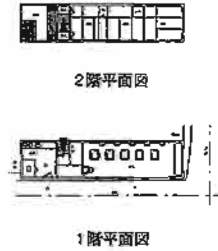
1階平面図

2階平面図

図3-9 辻商店



写真3-10 宮川美髪館



2階平面図

1階平面図

図3-10 宮川美髪館

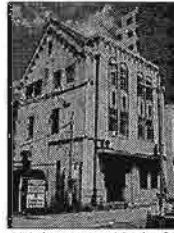


写真3-9 辻商店

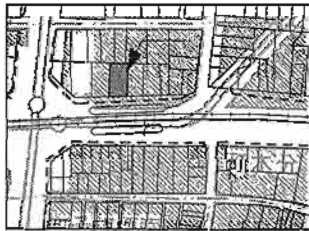


図4-1 旧大黒屋：軒切りの状況
(大正11年・現状)



図4-2 松井ビル：軒切りの状況
(大正11年・現状)



図4-3 キヨラカ理容院：軒切りの状況
(大正11年・現状)



新主屋（河原町通側）



旧主屋（御幸町通側）

写真4-1 山本家住宅

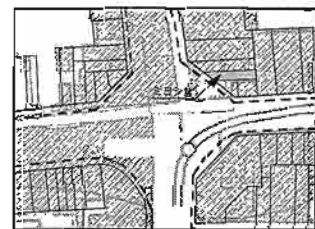


図4-5 ミヨシ堂：隅切りの状況
(大正11年・現状)



2階平面図



1階平面図

図4-4 山本家住宅

先述した近代町家の3類型は、みな伝統形式に近代的要素を付加したものであった。しかし、箱型町家は伝統形式との接点が稀薄である。その意味で、京都における近代独自の町家はと問われれば、箱形町家ということになる。

4. 家屋立地と家屋形式

京都における近代町家の成立過程には、市街地における道路拡幅の影響が大きい。近代京都における幹線道路形成は、京都電気鉄道株式会社による狭軌電気軌道（京電）の敷設、京都市三大事業による市内幹線道路の拡幅と市営広軌電気軌道（市電）の敷設、都市計画法・市街地建築物法による都市計画道路の設置を中心に進められ¹⁴、これら諸事業による道路拡幅は、沿道の町家に直接なる影響を与えた。「軒切り」あるいは「隅切り」と呼ばれた拡幅事業は沿道の景観を一変させたことのみならず、沿道の町家の立地条件を大きく変え、これに規定された新たな町家形態が出現した。しかし、道路の拡幅過程などはこれまでよく明らかにされているものの、それに伴う町家への影響の実態にまで関心は及んではいない。そこで本稿では、京都における近代町家成立の一端を道路拡幅に求め、具体例に即してその実態を明らかにしたいと思う。

4.1 軒切りの影響（図4-1～4、写真4-1）

例えば、調査家屋が多く立地する河原町通りでは、拡幅は片側買収主義により通りの西側が主に買収された¹⁵。これにより、大正13年（1924）10月から昭和4年1月までの間に順次北から南へと¹⁶、当初幅約4間ほどの道が所定幅員12間まで拡幅された¹⁷。河原町沿道に残る遺構を悉皆的に踏査して聞き取りをしとて、拡幅による沿道の建築物への影響は、1) 曳屋をする、2) 主屋の奥行規模を切り縮め、前面を大改修する、3) 規模を縮小して建て替える、の3種に分類ができた。

河原町通りにおける道路拡幅では、曳屋により従前家屋を維持した事例は3例を確認した¹⁸。先述の辻商店はR.C.造で堀川通りに面するが、同通りの拡幅時（昭和31年）には曳屋をされて現地まで移動されている。軒切りにより主屋を切り縮めた例は、河原町通りでは1例確認した¹⁹。先にあげた三条通りに面する旧大黒屋はこの典型例である。それに対して、河原町通りで全面的に建て替えられた事例は、確認できただけでも7例と最も多い²⁰。これは、河原町では片側へ最大約8間も切り縮めるといふ大幅な拡幅がなされたため、この7例の中には、松井ビルやキヨラカ理容院などが含まれている。この2例は三階建てで奥行が4間半から5間と浅く²¹、しかも裏手に空地はなく敷地いっぱい建てられている。なお、キヨラカ理容院では古材の利用が確認できた。軒切りにより撤去された従前の建物の部材を利用したのであろうか。

さらに、道路拡幅が近世以来のコミュニティにも影響

を与えていることも知り得た。河原町通りに面する山本家住宅（下京区安土町）は、元々河原町通りの一本西側の御幸町通りに面して主屋を建てていた。同通りが拡幅と市電の敷設により（昭和元年）幹線道路となるに伴い、同家では御幸町通りに面した主屋（伝統的な京町家で明治期頃の建築とみなされる）をそのままに、拡幅された河原町通りに面して新たに主屋が建てられた（昭和2年頃）。総二階建て、間取りは通り土間を持つ伝統的な平面を踏襲しつつ、外観は黒塗りの洋風パラペットを河原町通りに沿って斜めに立ち上げて軒先を隠す、いわゆる看板型町家の典型例である。この時点に至り山本家の東西に長い短冊状敷地は、その左右（表裏）に新旧の主屋が並存する状況となる。同家では河原町通り側の新主屋に居を移すとともに、旧主屋はその後借家とされた。

注目されるのは、借家となった元主屋における改造である。すなわち、同屋の通り土間はその一部が細長く区切られ、河原町側に住む山本家の専用通路が造られた。この通り土間内の通路は、旧来の御幸町通りを軸とする安土町の町内組織との関係を山本家が維持するために設けられたものである。山本家における主屋の移動は、河原町通りの拡幅による表裏の逆転に対応したものであったが、その結果、従前通りの形が存続された同家が属する町内組織から切り離されるおそれが生じた。通り土間内通路はその矛盾を解消し、既存コミュニティとの関係を保持するための対応策であった。この通路は、今日もなおその機能を果たし続けている。

道路拡幅は、単に沿道家屋の建て替えなどの直接的な影響に留まらず、時には両側町の既存コミュニティにも抵触する影響を与えつつ実行されたことが知られる。同時に、山本家に見るような道路拡幅による宅地の表裏の逆転に際して、通り土間が有効に働いていることもあわせて注目しておきたい。

4.2 隅切りの影響（図4-5～7、写真4-2～3）

隅切りを受けた家屋の場合、その結果生ずる特異な敷地形状が、単なる軒切りとは異なる特異な制約条件となる。隅切りを受けた交差点角地に立地する後述の調査家屋は、基本的にすべてが建て替えられているのは、建物が斜めに切断されるため、改修が困難であったためであろう。この場合、外観を洋風とし箱形の住宅とする事例がより顕著で、千本今出川角に位置するミヨシ堂はその典型例である。前面の店部分を台形あるいは多角形平面として敷地の変形を吸収することで、裏手居室部には整形で畳敷きの部屋を確保する、という傾向が読みとれる。ミヨシ堂では、台形平面の店舗棟の裏手に前宅の座敷部が残されていることもその好個の例であろう。

宮城ミシン工作所（上京区千本通丸太町角、昭和初期）は、隅切りにより生じた直角二等辺三角形の敷地に建てら

れた二戸一建町家の一戸分である。敷地の南端に庭をとる台形平面の町家で、千本丸太町交差点に面したファサードはパラベットを立ち上げて純洋風とするが、裏面の外壁からは在来の木造であることが窺える。奥行は浅いものの通り土間型の平面を構成して、いわゆる看板型町家に位置づけることができる。

旧篠原自転車（上京区今出川通鞠小路角、昭和初期）は隅切りにより生じた極端に狭小な変形宅地に建つ家屋である。外観は四方にパラベットを高く立ち上げた木造総二階建である。一階は店舗に加え狭い台所を設ける程度で、居室は二階に持ち上げられている。通り土間による水平（奥行）方向の導線を軸とする伝統的な町家平面に対して、この住宅は階段を軸とする積み上げ型平面を構成し、前章で提示した箱型町家に分類することができる。

軒切りにより生ずる台形敷地は、前近代においてはあまり存在しない近代特有の立地条件であり、拡張後の道路幅が広い分、軒切り後の敷地は狭小となることが多い。隅切りに対応した近代町家は、その変形平面と狭小さに規定されて伝統的な町家形式は成立しにくく、必然的に独自の形態と外観を構成することになる。特にその台形プランとそれへの平面的対応の特異性は際立っている。

5. むすび

以上、京都市街地における近代洋風町家の建築的特徴について典型的に検討した。以下にその結果を要記してまとめとする。

洋風町家は、家屋構成の特徴から4種に大別できた。まず、京町家の伝統的な家屋構成に則り、その表屋部に洋風の店舗棟を建てる事例が多く見いだせた。本稿ではこれを洋館連結型と名付けた。明治23年の旧家辺徳時計店は木骨煉瓦造の店舗棟が明治の洋風商店としてよく知られているが、洋館連結型の最初期の事例であるとともにその典型事例としても貴重であることを指摘した。洋風の店舗棟は、耐火性への要請からR.C.造とするものもあり、外観からだけでは伝統的町家との関連性は窺い知れないが、通り土間を基軸とするその平面と家屋の構成には紛れもなく京町家の基本構成が踏襲されている。近世以来の職住を分ける表屋造りの合理的な家屋配置は、洋館を町家建築に導入する際にも有効に働いた。

次に、専用住宅を中心に多くみられる型として、洋風の応接間などを西洋館として和館の主屋前面などに張り出して建てる家屋で、洋館付設型と呼んだ。これは、近代の仕舞屋型町家における洋風摂取の代表的な家屋形式であると位置づけられる。この洋館部を診察室とする開業医院なども京都では多く残されている。

続く看板型町家と呼ぶタイプは、ファサードを防火・防水仕上げの一体的な洋風で構成するが、間取りは、角地を除けば伝統的な京町家平面を基本的に受け継ぎ、室内は和

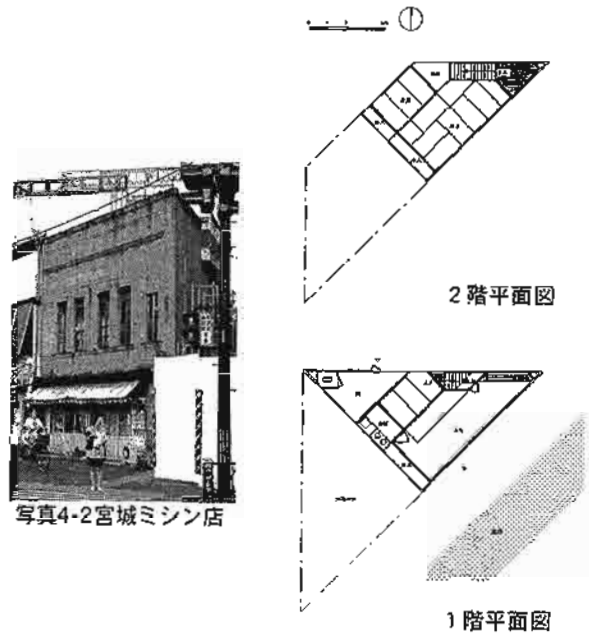
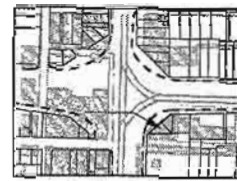


写真4-2 宮城ミシン店

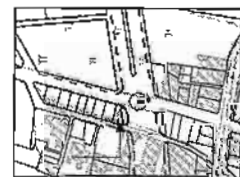
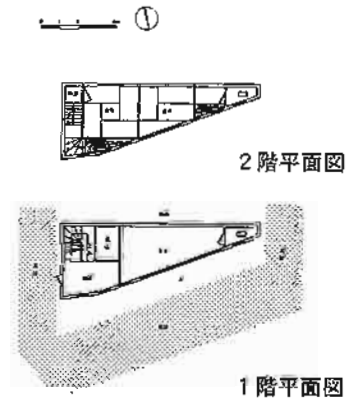


宮城ミシン店：隅切りの状況
(大正11年・現状)

図4-6 宮城ミシン店



写真4-3 旧篠原自転車店



旧篠原自転車店：隅切りの状況
(大正11年・現状)

図4-7 旧篠原自転車店

風の造作を基調とするもので、市中には大量に現存する。

さらに箱型町家と呼ぶ類型を見いだした。小規模な町家や三階建に多く認められる型で、一階は店舗のみとなり上階に居住機能を積み上げ、職住の関係が垂直方向の導線に連結している。伝統的な通り土間を欠くという点で上記3類型とは異なる特異な平面を構成している。軒切りなど近代の都市改変により生み出された狭小宅地などに多く認められ、近代に新たに成立した類型とみなされた。また、軒切りに加え、隅切りで生じた三角や台形平面の変形宅地には、その制約から箱型や看板型町家が多く建てられた。その特殊な敷地形状は、伝統形式を払拭した洋風意匠の外観を形成する契機となっていると考えられた。

以上のような4類型は、平面構成を基本に据えながら、洋風的要素の摂取形態の違いに基づく建築構成の差異に着目したものである。京都における近代都市住宅は、少なくとも洋風意匠をその内外の表層に張り付けるといった段階にとどまらず、伝統的な家屋構成を継承しつつ、本稿ではいわゆる洋館と呼んだ純洋風の家屋（煉瓦造やR.C.造を含む）を積極的に建築レベルで取り込むことにより形成されていることを明らかにした。

道路拡幅などはその重要な契機として無視できないが、より一般的には時計店などに代表される近代に成立した新種の業種を中心にその店舗あるいは店構えに対する強い洋風指向がその背景にある。しかし、これとは対照的に、居住部分においては座敷を核とする伝統形式を保持する傾向が強く看取された。要するにこれら近代町家の構成においては、居住部の保守性と生業部の新奇性との両立が意図されたのである。

道路拡幅された沿道では、景観要素としての町家は拡幅道路の近代性に喚起されてそのファサードを形づくった。それは、個別の業種が求めた洋風意匠への指向を越えて、都市に込められた近代あるいは近代化という時代の指向にまさに呼応した洋風化と捉えることができよう。その意味で道路拡幅は、町家の洋風化を促進させる主要な契機となるものであった。

本論の冒頭で述べたが、今日に残る洋風町家は、大正から昭和初期にかけての遺構が多い。これは京都における道路拡幅時期と有意な関係にある。近代町家の洋風化は、都市の近代化と一体に捉えることができるのである。これはひとり京都のみの状況ではないであろう。しかしながら、こと京都においては京町家という堅固なる伝統形式の存在により、戦後の今日においてもなお、町家という固定概念を京町家の伝統性が占めている。しかしながら実態としての京町家は、半世紀以上も前に既成概念を脱した新たな展開が都市的なレベルで進展しつつあった。この事実の発見は重要である。今後、京町家の理解が近代にまで及ぶことで、町並保存や景観形成に新たな視野と視点が加えられることを切に望みたい。

<注>

- 1) 大場 修, 山田智子: 近代大阪における町家の諸相 - 近代町家の評価に向けての一考察 -, 日本建築学会計画系論文集, 509, pp.197~202, 1998年7月
- 2) 小林文広: 明治維新と京都, p.10, 臨川書店, 1998年, 他
- 3) 京都府教育委員会: 京都府の民家, 第六冊, 1970年, 中村昌生: 京の町家, 河原書店, 1994年, 他
- 4) 京都市文化財ボックス第8集, 京都のすまい, 1993年
- 5) 石田潤一郎, 他: 近代建築ガイドブック関西編, 鹿島出版会, pp.131, 178, 1984年4月 (同書では、家辺徳時計店、富士ラビットスクーターの2件が収録されている)。福島明博: 近代名建築京都写真館, 日本機関紙出版センター, 1996年1月 (同書には、本研究で調査した町家遺構の中で、家辺徳時計店をはじめ、井上薬局、ムラナカ理容店、平楽寺書店が収録されている)。町田忍: ぶらり散歩 懐かしの昭和, pp.87, 扶桑社, 2001年4月 (同書には、井上薬局が紹介されている)。なお、新版 日本近代建築総覧 (日本建築学会編, 技法堂出版, 1980年3月) では、本研究で調査した町家遺構は、家辺徳時計店、富士ラビットスクーター、革島外科医院, の3例が取り上げられている。
- 6) 南北は七条通りから北大路通り, 東西は東大路から西大路通りにかけての範囲を設定したが、一部この地区周辺の遺構においても必要に応じて拾っている。
- 7) 個別の訪問聞き取り調査を行い遺構ごとに調査シートを作成した。なおこの作業は、本助成研究以前に行っていて、王易 (当時、京都府立大学大学院) が中心に取り組んだ。王易は、これらの遺構調査の成果に基づいて修士論文をまとめている (王易: 京都旧市街地の近代町家の特徴に関する研究, 京都府立大学大学院生活科学研究科住環境学専攻修士論文, 2000年1月)。
- 8) 各遺構の調査シートから比較的保存が良好で史料などが残るものなどを含め調査協力の得られた遺構を選定した。
- 9) 田中泰彦: 京都幕情, 京を語る会, 1974年8月。
- 10) ミヨシ堂には、建築当時の設計図が残されている。これによると、名称は「庵原時計店新築設計図」で、合資会社山虎組設計部により昭和4年1月に作成されたことが分かる。なお、三階建ての計画案も残されている。
- 11) さよなら京都市電, 京都市交通局, 1978年9月
- 12) 当時は「千本の時計台」として有名であったらしい (家伝)。
- 13) 谷直樹: 京の町家, 明治大正図誌 第10巻, 京都, p.155, 筑摩書房, 1978年6月
- 14) 建設局小史編纂委員会編: 建設行政のあゆみ, 京都市建設局, 1983年
- 15) 河原町通りは基本的に西側のみ買収された (京都市史編纂所: 史料 京都の歴史4 市街・生業, 1981年11月)。
- 16) 大野政男: 京都市都市計画街路・道路, 京都市, 2000年
- 17) 京都府総合資料館編: 京都府百年の年表7. 建設・交通・通信編, 1969年
- 18) 現地踏査により出町岡田商会 (上京区青竜町, 西側), 栗原時計店 (同町, 西側), リフォーム横江 (下京区天満町, 西側), の3例を確認した。
- 19) 三宅産業 (下京区万屋町, 東側) が確認できた。
- 20) 乾物屋松長商店 (上京区青竜町, 西側), 中井タバコ店 (上京区大宮町, 西側), たばこ吉田店 (上京区上生洲町, 西側), キヨラカ理容店 (上京区出水町, 西側), 松田ビル (中京区指物町, 西側), 川崎たばこ店 (下京区西橋詰町, 西側), 酒屋ヒデノヤ (下京区御影堂町, 東側) の7例である。
- 21) キヨラカ理容院では奥行幅が約7間削られている。河原町では残余の宅地よりも売却敷地の方が奥行が長い。